

インフルエンザ 21 世紀

瀬名秀明著 鈴木康夫監修 文春新書

本書は、サイエンス小説を得意とする作家瀬名秀明が、今回のパンデミックを縦糸に、そしてそれにさまざまな形でかかわった人々への独自のインタビュー取材と彼らの仕事ぶりを横糸に織り上げた、ノンフィクションの人間模様というべき一冊である。新書版ながら全5百ページの意欲作である。

新型インフルエンザに関連しては、これまで幾多の本が上梓されてきた。それらとの違いは何か？ まずはボリュームからもわかるが、一冊の本として書き上げるのに使った労力の違いがあるはずである。観念的知識を右から左に移したようなものではない。また文章の質からいっても、玄人もどきのもの書きとプロの書き手との差は歴然である。後者であっても、巷でもてはやされているような気障なものではない。まじめな理系人間の文章である。だが何より、これまでになかったその内容とその構成である。素人相手にひどい脅しをかける安易で薄っぺらなものとは、明らかに一線を画すものである。

インフルエンザとたたかう人びとの「小列伝」

本書は、いわば「インフルエンザとたたかう人びとの小列伝」的性格を帯びている。われわれは何かにつけ「組織」に目を奪われやすい。だが実際は、組織に人格があるわけではない。人間が組織を動かしているのだ。逆に個人が組織の権威を利用する悪しき事例も目にするものの、結局は人間なのである。

彼の他の作品から容易にうかがい知れるのだが、瀬名氏はロボットに並々ならぬ興味を持っている。東北大学工学部の特任教授まで引き受けているくらいである。このロボット好き、感情もない単純機械としてのロボットではなく、裏返せばこれも人間への興味である。作家たる者、そうではなくては、書評子は本書もその延長線上にあると見た。

登場するのは30人を超えるスペシャリストたちである。おもに今度のパンデミックに仕事として何らかの形で係わった、大学や企業の研究者、医療関係者、行政関係者、ジャーナリストなど幅広い領域の人たちである。報道で常連の何人かの有名人を除き、多くはその道では良く知られて

いても一般にはほとんど知られることのない人たちである。だが、著者は彼らの人となりにも力を割いており、読めばすぐ一人一人に親近感を抱くようになる。各人、登場箇所では主役である。パンデミックの現場でどのように考え行動したか、彼ら/彼女らは、瀬名の筆による心地よい緊張感をともなった文章のなかで、みな輝いている…テレビに露出する政治家に当てられたライトの反射よりずっと。パンデミックとのたたかひの主戦場はテレビ画面ではない。多くの人びとが人知れずとも自分の持ち場で努力の限りをつくした現場にあったのだ。本書はそれを教えている。

インフルエンザ研究の多様性の供覧

本書はまた、今回のパンデミックの現場とは直接かかわりがなくとも、インフルエンザという人類の大きな課題にウイルス屋、インフルエンザ屋として兆戦してきた人たちと、その長年にわたるライフワークともいえる独自の仕事も詳しく紹介している。また、ウイルス学そのものとは大きくかけ離れている統計・情報処理分野のような、われわれウイルス屋にはほとんど縁がなかったような領域も、わかりやすく解説されている。興味範囲の広い著者の面目躍如である。

著者瀬名氏と本書のできるまでについて

瀬名氏は、難解なサイエンスを平易に紹介できる数少ない作家である。それにはそれなりの知的咀嚼が求められる。そこは才能と努力である。作家瀬名秀明は大学院で薬学を学んだ薬学博士でもあるが、彼の興味の対象は医学、生物学、そしてロボット工学や航空宇宙学など極めて多方面に向けられている。学習に貪欲で、「インフルエンザ研究者交流の会」や「みちのくウイルス塾」でも熱心にメモをとっている。

聞けばこの本、昨年4月の新型勃発1か月後の5月下旬に企画が持ち上がり12月下旬上梓という。そのように短い時間で取材から執筆までよくぞやり遂げたものである。だからといって決して手抜きはない。並々ならぬ努力の結晶であろう。記述内容の正確さがその証拠である。本書のウ

ウイルス学的な解説部分については、とくに内容的に間違いがないか、当事者に確認を取りながら細心の注意で書いている。さらに著者のご尊父、ウイルスレセプターの糖鎖研究で有名な中部大学教授、鈴木康夫先生が監修していることを付け加えておく。

忘れ去られないために

クロスビーは、その著書 *Americva's forgotten pandemic* (邦訳『史上最悪のインフルエンザ』みすず書房) の中で1918年のスパニッシュ・フル・パンデミックを経験した人びとがその悲惨な経験をいとも簡単に忘れていと指摘しているが、今回も同様のようである。だが、忘れる前に、このパンデミックのできごとを記録すべきである。大正時代に内務省衛生局が残した『流行性感冒』並の立派な記録が残されれば良いが、その話は聞かない。報道では厚生労働省が総括のための会議を開くとはいうものの、このま

までは一般の人が手にとって振り返るための記録が何も残らない危惧すらある。本書がその代用になるものではないが、現場の人間がいかに考え働いたかの、唯一のまとまった著作になる可能性は高い。数少ない記録の一つとして、後世の人たちは本書を手にし、先達たる登場人物のことを知るかもしれない。そのとき現在最先端の科学の記載は古びてしまっているかもしれないが、人間への興味は色あせるものではない。また今を生きている若い人たちに、ぜひ読んでいただきたい。

ただ残念なのは、メインプレイヤーの何人かが欠けていることである。聞けば都合で取材が叶わなかったとのこと。願わくば続編でそうした人たちにもご登場いただき、「小列伝」から小の字抜きで紹介したいものである。

国立病院機構仙台医療センター

臨床研究部ウイルスセンター 西村 秀一